

スタジオジブリと近代文学

——「千と千尋の神隠し」と泉鏡花「龍潭譚」

箕野 聡子

1. はじめに

宮崎駿監督の映画「千と千尋の神隠し」(2001)が上映されたおり、その千尋が経験する〈異界〉はルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」(1865)を連想させるものとして評価された。また、「トンネルのむこうは、不思議の町でした。」というキャッチコピーは、「不思議の国のアリス」のほかにも、川端康成の「雪国」(1935)の冒頭「国境の長いトンネルと抜けると雪国であった」のもじりとして注目された。題名やコピーから連想されるこれらの作品世界と同じく、こ・ち・ら現実とは違・う・あ・ち・ら〈異界〉の物語という側面が特に強調された「千と千尋の神隠し」は、〈異界〉での少女の活躍が主に描かれたため、現実での少女がどう成長したかについての言及は乏しい。しかし〈異界〉は、他界のように知らない世界ではなく、自らの経験と想像力のもとに立ち上るものであるから、〈異界〉が現実を映し得ないことなどあり得ないのである。ましてや冒頭場面で、引越しと転校とを両親の勝手によって迫られ、不満と不安とに満ち、むくれていた十歳の千尋が、〈異界〉でもまた強引に新しい世界になじむよう迫られたことを思えば、物語世界に現実が大きく関与していることは否めない。

「千と千尋の神隠し」の内容を読み説くとき、しばしば泉鏡花の「龍潭譚」(1899)が、影響を受けている作品としてあげられる。主人公の少年千里の年齢が十歳であること、龍神の存在が示唆されること、また、四大自然(エレメンツ)が描かれていることなど^①が、過去の指摘の中心であった。ここでは、「龍潭譚」の千里が抱える親の問題と、「千と千尋の神隠し」の千尋が抱える、やはり親の問題に注目し、両作品を比較したい。そして、親、特に母親の問題の解決を巡る、少年と少女との自立のテーマを考察する。

2. 神隠し

「千と千尋の神隠し」の題名には「神隠し」という言葉がはいっている。神隠しとは、主に天狗や狐や河童といった妖怪たちがこどもをさらっていくことをいう^②。これらの妖怪たちに共通して言えることは、人間が彼らへ時には妖怪として恐れ、また別の時には神として敬っている点にある。日本文化において神は、しばしば人の信仰によって生み出される。そして妖怪は、人が自ら信仰によって生み出した神を敬わなくなったときに生まれることが多い。例えばスタジオジブリの宮崎駿監督「もののけ姫」(1997)の冒頭シーンはその様子をよく表している。アシタカが射してしまうタタリ神は、もとはどこかの山の名のある神であったにも係わらず、人間に鉄砲でうたれることで、タタリ神という名の妖怪へと転じる。その妖怪を射殺してしまったアシタカの住む土地の巫女は、その遺骸を塚に納め、再び神として祀ることを約束するのである。

神隠しをするといわれる天狗や狐や河童も、多くの場合は祠や鳥居が築かれ、祀られていることが多い。「龍潭譚」の千里は神隠しにあう前に、「稲荷の社」を目にしている。実際に少年を「異界」へ迎え入れたのは龍の

化身であろう「うつくしき人」であったが、彼を隠したのは狐であったといえよう。それゆえ叔父の奈四郎が、帰ってきた千里を捕まえたときに、千里を「狐つき」として柱にいましめてしまうのである。

では、千尋はどうか。千尋はいつへ異界へ入り込んだのであろうか。千尋がへ異界で暮らしているように案内したのは、龍の化身であるハクという名の少年であったが、千尋がへ異界のはじめの扉をくぐったのはそれよりはるか前、父が、運転する車を間違えた道に入れてしまった瞬間である。その部分の映像を注意してみると、小さな鳥居が見える。鳥居は、分かれ道の大きな木の根元にあるのだが、映像をよくみるとその木は上部を雷でうたれたように失っているのである。高い木の上には天狗が住み、地上に降りてくる神々の世話をしていたことを考えれば、木を焼かれた天狗はその役目を果たすことができず、落ちぶれて妖怪になったと考えられる。その無残な姿に対して人々は、鳥居を置くことで災いを避けたいと願ったのであろう。しかし、この木に住む天狗は、その人々の願いもむなしく、ここで神隠しを行ったのだ。千尋が迷い込んだへ異界で力を振るっていた湯婆婆は、大きな鼻を持ち、空を飛んだ。湯婆婆の造形もこの天狗の神隠しを念頭に置いたものであろう。

3. 境界を越える

間違えた道を暴走した車は、赤いトンネルの前で止まる。テーマパークの残骸とも思われるそのトンネルをくぐり更に先に進むと、無人の町がある。町の装飾は奇抜で、至る所に赤い色が使われている。町の奥にある油屋に架かる橋も赤く色づけられている。赤い町に千尋は迷い込むのである。

「龍潭潭」の千里が迷い込むのも、赤の世界である。一人で行ってはならないといわれた山には、「紅の雪」のごとく躑躅が咲き乱れ、「ゆふ日あざやかにぼつと茜」さす。その紅の世界の中で方角を失い、迷子になった千里は、毒があると教えられていたはずの「色彩あり光沢ある虫」を追い、「さるものとはともに遊ぶな」といわれていた「児ども」らと隠れ遊びをし、「人顔のさだかならぬ時、暗き隅に」隠れるのである。

日本の文化において境界は主に赤い色で表す。この境界に少年少女は身を置いていたといえよう。この境界から「異界」へと入り込むにあたって、彼らはさらにいくつものタブーを犯すのである。してはならぬといわれたことを、次々と行つた千里のように、千尋もまた、一刻も早く立ち去るようにいわれた場所に、父母を捜すためとはいえずぐずぐずと止まり、日が暮れて人の顔さえさだかではない暗い隅に隠れ、息をしてはいけなといわれた橋の上で息をしよう。

4. 相互誤認

しかし、彼らを最も「異界」に近づけたのは、彼らがこれらのタブーを犯したことにはない。「異界」に近づいた彼らを「異界」に飛び込ませたのは、彼らが一番信じていた人達が彼らを見失ったことにある。

「異界」に入る手前で、現実に踏みとどまるべく千尋が両親を捜しに戻ったとき、両親は千尋に気がつかない。そして、千尋は両親を見たとき、それを豚であると判断し、別の方角に向かつて父と母とを捜して走りだし、大声でその名を呼ぶ。千尋と両親とは、ともに相手を認識することができなかった。溢れ出た水が彼女の行く手を遮るまで、彼女は駈けに駈けるのだ。

「龍潭譚」では、道に迷つて「あるほど声を絞りて姉をもとめ」た千里も、実際に姉が彼を捜しにきたときには、その姉を本当の姉ではなくなにか「恐ろしきもの」なのではないかと怪しみ、すぐにはその前に姿をみせることができない。そして姉もまた、毒虫に刺されて腫れ上がった千里の顔を見たときに、「違つてたよ、坊や」と「いひずてに衝と馳せ去り」彼を認めることができない。「千と千尋の神隠し」において、荻野千尋が千とのみ呼ばれるようになり、本当の名を失うことで「異界」の住人となつたように、この瞬間千里もまた、「異界」では必要のない実の名を失うのである。口惜しさに千里は、「あとをも見ずて駈け」に駈け、大沼の水に行く手を遮られて倒れるのである。

彼らを「異界」へと向かわせる決定的な事柄は、現実で最も信じたい人に自らが見失われてしまふ経験にある。しかしまた彼らにとつて、その最も信じたい人との関係こそ、現時点で彼らが抱える最も困難な問題でもあつた。新しい環境を強いる両親（特に母親）に対して今までのように無条件に甘えることが許されず、大人としての振る舞いが求められた千尋と、幼くして失つた母の代わりに姉に対して母性を要求し、それが時には否定されてしまふ千里。彼らが抱える人間関係の要にあたる人と自分との相互誤認によつて、彼らは「異界」へと飛び込んだ。そして、「異界」において彼らはこの「母なるもの」との関係を再び考え直すことになる。その機会をあたえるのが、「千と千尋の神隠し」のハクと、「龍潭譚」の「うつくしき人」とである。そして、「異界」においてハクも「うつくしき人」も、共に少年少女を必要としていたのである。

5. 相互認識

〈異界〉において、現実の世界にいた時の少年少女を知っている者は、それぞれの物語においてただひとりずつである。「千と千尋の神隠し」のハクと、「龍潭譚」の「うつくしき人」とがそれである。それは彼らが現実との関わりを持つ者であることを示す。

「千と千尋の神隠し」において、一見ハクは千尋を助けてくれる存在のように印象づけられる。しかし千尋を〈異界〉に連れ込んだのは違いなくハクである。日暮れまで「私が時間を稼ぐ」と言ったハクが呪文とともに息出した息は、かえって日暮れを早めてしまうし、食べるように千尋にあたえた丸薬は千尋を〈異界〉で実体化してしまう。息をしてはいけないと言いながら千尋に橋を渡らせたハクは、しかし結局、息をするかしないかに関わらず、橋を渡ることと〈異界〉の中心へと千尋を連れ込んでいるのである。更にハクは千尋が長く〈異界〉で生きることができるように「働きたい」とだけ言うことを教える。両親に逢わせてやることによって真偽はわからぬそれらしき豚をみせたのはハクであるし、元氣が出るまじないをかけたおにぎりを千尋に食べさせ、両親を救うために〈異界〉で生きていくことを決心させたのもハクである。千尋の名前を書いたカードと洋服とを取り置き、やがて千尋がもとの世界へ帰る人間であることを示しながらもハクは、過去の記憶を失いかけている自分にとって、唯一過去の記憶から拾い起こすことのできた千尋という存在を、自分の影響力で〈異界〉に留めてしまうのである。

「龍潭譚」において「うつくしき人」は、「此方へおいで。此方」と千里を「社の裏」に導き、せっかく家の近くまで帰ってきていた千里を再び迷わせてしまう。捜しに来た家の者達からも遠ざけてしまい、それらの者

たちの方こそ「恐ろしきもの」^③であると勘違いさせてしまう。そして、姉が弟を誤認する様をじっと見守っているのも彼女である。〈異界〉に入った途端に千里の顔の腫れが引くことを考えれば、千里の顔の変化にはこの「うつくしき人」の力が働いているかもしれない。もとより、この女は泉鏡花の「高野聖」(1900)の女と同じく、人を動物に変えるほどの力を持っているようであるし、このあたりの人物造形は、「千と千尋の神隠し」で人間を動物や物に変えてしまう湯婆婆にも似ている。「この児を返さねばならぬから」と美しき女は客としてやってきた千里の帰還を予言してはいるが、「可愛いお兄」がそばにいることを「嬉し」く思い、彼女はこの夜、千里に寝物語を聞かせ、乳房をふくませ、母らしき振る舞いをすることに徹する。

彼らは少年少女のことを記憶しているが、少年少女のほうでは、彼らを正確に記憶しているわけではない。千尋はハクをはじめは覚えていなし、千里は「知人にはあらざれど、はじめて逢ひし方とは思はず」といった程度の認識しかない。しかし、少年少女は、〈異界〉から出る前に、彼らのことを声高に別の名で呼ぶのだ。千尋はハクを「コハク川」と、そして千里は「うつくしき人」を「母上」と。彼らが待っていたのは、おそらくこれらの〈異界〉と現実とを繋ぐ言葉で、それを聞くために少年少女は〈異界〉に留められたといえる。そして、千尋が後ろを振り返らずに現実に戻り、千里が姉に生きる力を支えられて〈異界〉に戻ることをやめた後、ハクは取り戻した記憶によって現実への帰り道を見つけることを確信し、「うつくしき人」は深い淵、つまり龍神の住む龍潭を現出させるのである。

では、少年少女は、なぜ彼らを「コハク川」や「母上」と言う名で呼ぶことができたのであろうか。また、そう呼ぶことは少年少女にとってどのような意味があったのだろうか。

この問いを考えるにあたって、まずは、少年少女それぞれにとっての母の問題を考察したい。

6. 目覚めさせる母性（親性）

千尋は、〈異界〉で、父母ではないはずものを「お父さん、お母さん」と呼ぶ。眠れない千尋を起こしに来たハクは、「お父さんとお母さんに逢わせてあげる」と言い、千尋を豚小屋に連れて行く。千尋はハクの言葉信じ、眼の前の豚を父母であると思ひこむが、千尋自身が見分けたわけではなく、真偽は定かではない。千尋は豚に對して「お父さん、お母さん」と呼び、これらを人間として、自分の親として目覚めさせようとするのである。

千尋は、〈異界〉で、「うつくしき人」に抱きしめられて眠りにつくが、ふと目を覚ましてしまう。淋しさにたえかねて女に触れようとするが、女の肉体は霞のようで触れることができない^①。女の胸元の守刀をみて「亡き母上」の死の床を思い起こした千尋は、その刀を取りのけようとする。そのとき、どういうはずみにか女の体からは血汐がほとばしる。自らの動作により血汐が流れたことに動揺し、「両の拳」で押さえようとするが、我が手に血の色がつくことはない。「うつくしき人は寂として」動かぬ。だが、血汐と思つたその色は、「すゞしの絹をすきて見ゆる其膚にまとひたまひし紅の色」であるとかわかつて、千尋はこの女を「母上、母上」と声高に繰り返して呼ぶ。千尋はこの女を、生なる者として、母として目覚めさせようとするのである。母の乳の思ひ出が忘れられず姉の胸をまさぐっては許されずにいた千尋にとって、母は恋しい人ではある。しかし、その思ひ出は「死」に直結していた。千尋が母への思いから自立することができないのは、母が不在であるからだ。だから千尋は、母を生きるものとして再生したかったのであろう。

少年も少女もこの事件の後すぐにぐっすりと眠ってしまう。そして次に目覚めた時には、このときのことがある。夢の中での出来事であったかのように、慌ただしく別の事件に遭遇する。しかしその深い眠りの前

に、千尋は両親を豚と断定して社会的死を与えてしまい、千里は、自らの手で母に似た人に血汐を流させてしまふ幻覚をみるのだ。

両者ともこの時点では相手を目覚めさせることに失敗する。しかしここで、〈異界〉のものを親と呼んだことで、両者とも〈異界〉に執着してしまふのである。千尋は豚となった両親を救うまで〈異界〉に生きようと決心するし、千里は里に戻ってもしばらくは、九ツ筈に帰ろうともがくのである。

7. 目覚める母性

「千と千尋の神隠し」において、母と子との役割を考えたとき、まず坊と湯婆婆との関係があげられるだろう。彼らの関係は、金太郎とその母との関係に似ている^⑤。喜多川歌麿をはじめとする江戸時代の多くの浮世絵師は、金太郎とその母とを描くのに、しばしば山姥と鬼子という意匠を用いた。「千と千尋の神隠し」においての湯婆婆と坊とは、この山姥と鬼子という意匠に近い造形がなされている。しかし、湯婆婆は坊を溺愛して決して部屋の外には出さない。山姥は金太郎を手放して源頼光に託したが、湯婆婆には坊の外界での成長を見守る勇氣がない。そのため、その最愛の者の本質を見つけないことができないのだ。そして坊が銭婆の魔法によってその姿をネズミに変えられたとき、湯婆婆はそれを自分の坊として認識することができなかった。「龍潭譚」で、外へ一人で行くことを禁じてできるだけ弟を家の中で守ろうとしていた姉が、顔の腫れた千里を醜い少年としかみることができなかったように、湯婆婆もまた坊を、ただの薄汚いネズミとしかみることができなかったのである。

千里の姉の母性が未熟であったように、湯婆婆の母性もこの時点で未熟であったといえよう。しかし、「千と千尋の神隠し」では、これとは対照的に、千尋の母性の発達が鮮やかに描かれていくのである。〈異界〉において千尋が果たす役割は、子の役割ではなく母の役割である。千尋は特にハクに対して母性を發揮していく。血だらけの龍をみて瞬時にハクと見抜き、自分の命をかけてこの龍を救おうとする。のろいを受けて吐く龍の血は、千尋の掌を染める。しかしその血をみて千尋は怯えるのではなく、むしろ傷ついたハクを助けるために冷静になろうとする。

龍の腹の中の物が龍を傷つけていると知り、その呪いをはき出させるために苦団子を飲ませようとしたときも、「いい子だから」と小さなこどもに薬を飲ませる母親のように宥め、自分の危険も顧みず、全身でその看病にあたる。釜爺がこの様子を「愛だ、愛」と表現するように、千尋のハクに対する行為は、恋ではなく、愛（母性）から湧き出るものである。

作品の冒頭で、両親の勝手な行動にむくれていた千尋は、両親に甘えたいだけのこどもであった。トンネルをくぐるときも母親にべったりとくつき離れない。それを母親は、歩みにくいという。冷たい言葉にも聞かせるが、むしろ千尋の親離れが遅れていたといえよう。その千尋が、〈異界〉でハクを前にしたとき、その内なる母性が開花する。自身の母性を開花させることで、千尋は自分と母親との関係を見直すことが可能となる。千尋の母性の目覚めは、千尋が親から自立するために必要なことであったのだ。

8. 釜爺と老夫の役割

血汐に勇気を奮いたたせて母性を目覚めさせ、傷ついたハクを助けたいと願った千尋を次の世界へとみちびいたのは、釜爺の渡した電車の片道切符であった。また、血汐に気が動転し、母性に潜む「死」に怯えて意識を失った千里が気づいたとき、彼は、老夫の背に負われて家に送られていく途中であった。行く手を遮っていた水を船で渡り、それぞれは次の場へと導かれていくのである。

二人の爺の役割はともに、少年少女を今いる〈異界〉から送り出すことにある。水に囲まれ、一見脱出不能であったこの場所から、爺達は少年少女を出してくれるのである。しかしそれは、全く〈異界〉の外であるというわけではない。千尋のいく先は、湯婆婆の姉の銭婆のところであり、湯婆婆の力の及ぶ範囲ではないが、まったくの現実に戻ったわけではない。また千里は、老夫に送り届けられたさきが自分の家の近くであったにも関わらず、自分の家に帰ってもまだ狐つき^⑥と扱われ、いましめられ、現実に戻ってきたものとしては扱われない。

少年少女はまだ、現実に戻るための最後の試練に立ち向かわなければならぬ。それを乗り越えなければ、本当に現実にもどったことにはならないのだ。その試練とは、千尋にとっては両親を見つけ出すことであり、千里にとっては死に彩られた母の思いを断ち切ることである。つまり、彼らはそれぞれ、自分の抱える親との問題、特にへ母なるものとの問題に正面から取り組む必要があったのだ。

9. 自らの内から立ち上がる 〈異界〉

再び油屋に帰ってきた千尋を待ち受けていたのは、たくさん豚の中から自分の両親を選び出すという難問

であった。ところが、千尋はさして迷うまでもなく、ここに両親はいないという。なぜ、千尋にこのことがわかったのであろう。

千尋はこの問題を解く直前に、ハクの本当の名を思い出していた。しかし彼女は、自分の確かな記憶からその名を思い出したのではない。千尋は、千尋の母が自分に語ってくれた幼い頃の話の中の言葉として思い出したのである。母の助けをかり、千尋はハクを「コハク川」と呼び、ハクは「異界」から抜ける手立てを得る。

千尋は、両親の都合から受ける自分の災難について有り余る不満をもっていた。しかし、母の記憶によりハクを救ったことで母への不満が和らぎ、また自分の母性を育てたことで、母なるものへの愛の在り方を知ったのであろう。母の愛を再び信じることで、千尋の中で、現実の「母なるもの」の再生が可能となった。豚から人へ。そして千尋はこのとき、彼女の不満が「異界」での両親を豚に変えてしまったことに気づいたのだ。つまり、千尋の現実の両親が豚になったのではなく、千尋が自ら作り上げた「異界」の中の登場人物である両親が、千尋自身の思い込みで豚になってしまったのである。「異界」は自らの内に立ち上がるものであるから、そこに現実の両親が存在するということはありえない。「異界」に迷い込んだのは、ただ自分ひとりであったのだ。

意識の中で、親を人間ではないものにしたことによって、千尋は労働を約束して大人の義務を果たすことになったが、一人で生きる困難の中で、新しい環境でも生きていける力を得た。千尋が親から自立するためには、自らの母性を育てて自らが大人に近づく必要があったといえよう。それと同時に彼女は、自らが社会的に殺してしまった母に与えられた記憶の中で救われたことを知る。現実に戻るために再びトンネルをくぐる時、千尋はまたしても母にしがみつく、母は始めと同じように歩きにくいという。しかしトンネルを抜けた後の千尋には、

この母の言葉に不満を感じた様子はない。

「異界」を出るまで振り返ってはならないというタブーを守った千尋は、トンネルを抜けて始めて後ろを振り返り、ハクのことを想う。しかしここで、千尋の母性としての愛は、ハクに執着することを許さない。自立する子を信じ見守る母のように、千尋は「異界」にハクを残し立ち去る。「コハク川」の名は、千尋とハクとの関係だけではなく、千尋と両親との関係を見直すためにも重要な言葉であったといえよう。

10. 姉の母性の発達

家に戻った千里を待ち受けていたのは、自分を「狐つき」としか見てくれない人々の冷たい仕打ちであった。親代わりの叔父夫婦は彼を「暗室にいましめ」、朋達は「砂利、小砂利をつかみて投げ」つけ、姉は心配をしてくれるものの「心の狂ひたる」ものとしての扱いをやめるわけではない。千里と周囲の者との相互誤認は、ここではまだ解決していない。千里は「口惜しく腹立たしきま、身の周囲はことごとく敵ぞと思」い、姉さえも疑い、九ツ罅の「うつくしき人」のもとに帰ろうとするのである。しかし九ツ罅の「うつくしき人」は、千里にとつて「母なるもの」ではあるものの、その思い出は、実の母と同じく「死」のイメージに直結している。それゆえ「うつくしき人」を求める千里は、「ものも食はず、薬も飲まず、ただ「たけりくるひ、罵り叫び」次第にやつれて、「声も出でず、身も動かず、われ人をわきまへず心地死ぬべくなれりし」状態となってしまう。

千里が生きたるために必要なのは、母の負性の封印である。つまり、「母なるもの」のイメージを死から生へ転換せねばならない。それを可能にするのが、姉とともに参った寺で出会った摩耶夫人像である。生まれたばかり

の「をさなご」を、「玉なす胸に織手を添へて、ひたと、「抱きたまへる」その「尊き像」を拜んだ時、その像を共に拝み念じていた姉が、外の「雷の音」におびえる千里を抱き、「襟をば搔きひらきたまひつゝ、乳の下に」千里の「つむり押入れて、両袖を打かさねて深く」「背を蔽ひ」、「御仏の其のをさなごを抱きたまへるも斯くこそと」嬉しく思えるほどしつかりと、千里を抱きしめたのである。

死を象徴する守刀ではなく、生の象徴となる赤子を抱いたへ母なるものゝ姿を見、また、母代りの姉がその生の象徴を模倣するような態度を自分に対してとってくれたことによって、千里のへ母なるものゝイメーヂはようやく死から生へと転換することができたのである。そしてこの出来事は、千里の姉にとつても、彼女の母性を育てる大きな出来事になっていったといえる。千尋が母性を育てることで両親を再び見出したように、姉は母性を育てることで見失っていた千里を再び見出したのである。姉を通して、へ母なるものゝ愛の在り方を知ること、へ母なるものゝ愛を再び信じることで、千里には、生きるものとしてのへ母なるものゝ再生が可能となったのである。

千里が母への思いから自立することができないのは、母が不在であったからだ。へ母なるものゝを生きるものとして再生した千里は、母の思い出からも姉からも自立することが可能となった。この物語が、「海軍の少尉候補生」と成長した千里のこと、「関屋少将の夫人」となった姉のことを結びに記しているのはそのためである。雷の音を轟かせ、稲光を青く光らせ、激しく雨を降らせて^⑧、姉の母性の目覚めを促し、異界から完全に千里を現実に通し出した「うつくしき人」は、自らも現実に龍潭を作り出すことになる。千里が「うつくしき人」に向かつて呼んだ「母上」という名は、千里と「うつくしき人」との関係だけではなく、千里と姉との関係を見直すためにも重要な言葉であったといえよう。

11. おわりに

以上、スタジオジブリの「千と千尋の神隠し」と泉鏡花の「龍潭譚」とを比較し考察した。「千と千尋の神隠し」は、カオナシの登場部分を除いて、大いに「龍潭譚」の影響を受けていることがわかる。この二作品の影響関係を中心に考察したとき、そこに浮かび上がってきたのは、少年少女の自立の問題であり、へ母なるものへの再生であり、その手段としての主人公の一時的な親殺しのテーマであった。

〈異界〉を描くスタジオジブリの作品は他にも多数あり、それらの多くが日本の近代文学の影響を受けていると思われる。これらを比較考察することは、世界に誇る日本のアニメーションを日本文化史の中に位置づけるという意味でも意義があり、また、日本の近代文学が今なお現代人の心に響く普遍的なメッセージを持ちうることを確認する意味でも意義がある。

若者の活字離れが言われて久しいが、映像文化には敏感な彼らが、映像と文学との影響関係を知ること、再び文字の世界に帰ってくる可能性は十分にある。

註記

本文中の泉鏡花「龍潭譚」からの引用は、『鏡花全集 卷三』(岩波書店、1974)に拠った。

- (1) 宇月原晴明「仮想の孟蘭盆会」(『ユリイカ』第33巻10号、2001.8)では、「千と千尋の神隠し」も「龍潭譚」も、物語の主役は共に「四大。地、水、火、風」であると考察している。
- (2) 松谷みよ子「神かくし」(小松和彦編『神隠し譚』桜桃書房、2001.9)
- (3) 家の者達が千里を捜している間も千里は、「恐ろしきものは」として捉え、隠れた「社の裏の狭き」闇の隅からできることができない。慌ただしく人々が往來して自分を捜している様子を闇に隠れてみる様子は、「千と千尋の神隠し」でも描かれる。人間が入り込んだことを知った「異界」の者達が「人くさいぞ」と怪しみ、対処をハクにゆだねようと障子の内で捜し始める場面である。自分を捜してきた家の者達が「恐ろしきもの」に見えた千里には、彼らが、このとき千尋がみた「異界」の者達のように見えたに違いない。
- (4) 千里は頻りに「うつくしき人」に触ろうとするが、その身体は透けるようである。確実に触れることはできない。「千と千尋の神隠し」でも、千尋が「異界」に入り込んだ直後、彼女自身の身体が透けていくという体験をする。ハクの丸薬を口にして千尋の身体は「異界」で実体化するが、この透けていくのは、本来そこにいるものではないということを意味するようである。千尋が釜爺にもらった切符を手に乗り込んだ電車の乗客も皆、透けていた。これは、この乗客たちが本来ここに住むものではないことを示しているのだらう。九つ筋に住む「うつくしき人」も、本来の住む場所ではないところにいたということができよう。だからこそ、本来の住む場所として、深い淵、龍潭の現出が必要であったのだ。
- (5) 子が人並み外れた怪力であること、人の目につかない山奥に隠れるように住まわされていること、父親が不在であることなどがそうである。金太郎は、現在でも五月の節句にその人形が飾られるが、その訳は、金太郎が幼少の頃に源頼光に見いだされて後、頼光四天王のひとり坂田公時として立派に成長し、多くの妖怪を退治してきたからである。なぜ、金太郎が強いのかという理由については、乳母が攻め落とされた城の若君を育てていたからという説や、金太郎は山姥の子であるからという説などいくつもの説がある。
- (6) 千里に狐が悪いといふとするなら、千尋には何が悪いといふのだらうか。天狗は、神隠しはしてもそのことも悪くということはない。千尋がハクの吐き出した虫のようなものを踏みつぶしたとき、釜爺は「エンガチヨ」といって千尋の「エンガチヨ」を切る。これは千尋から汚れがなくなっただということの意味する動作ではない。本田和子氏の『異文化としての子ども』(紀伊國屋書店、1982)の中の、「エンガチヨ切った」という遊びの研究のなかには次のような考察がある。「汚物を踏むなどして『汚いもの』に触れた場合、『エンガチヨ』という魔力に取り附かれてしまう。急いで他者に触つて、その汚れを移譲してしまえば、『エンガチヨ』から免れるのだが、相手に『エンガチヨ切った』といわれてしまうと、いつまでも『エンガチヨ』を背負って孤立してしまえばならぬ。『エンガチヨ』とは、汚物によって汚れを受けた『汚い者』のことであり、同時に「魔力を持った特別な者」のことなのだ。つまり、千尋はその汚れを内に込めたことで、尋常ならざる力を手に入れたことになる。この力が、カオナシとの対峙を可能にするのである。

春日大社や四天王寺聖霊会の舞楽で用いられる面や、大黒祭りで大黒の嫁の役割を果たす二股大根、なまはげの面や翁の面などの意匠がそれである。

(8)

る。また、祭りの屋台でよく見受けられるひよこや路地裏のナメクジや蛙や蜘蛛やねずみも、経験から立ち上がる〈異界〉の意匠の原型である。龍神は、雨と風とを司る神であり、雷をおこし、稲光を生みだす。